ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生（一）

――『バルザズ・ブレイス』以前のラヴィルマルケ――

梁川英俊

はじめに

一九一一年、「ブルターニュ民族主義党」Parti National Bretonは、レンヌ市庁舎前に完成したブルターニュのフランスへの併合を記念する彫像の完成に抗議して、その除幕式の後、次のような「宣言」を発表した。

ブルターニュ民族主義党は、四世紀にわたってわれわれが耐え忍んできたフランスの圧制に断固として抗議するため、我が国の「失地回復運動」の勢力を結集することを目的とし、先頃、意を決した数人の青年たちによって結成された。（……）われわれは粉砕され、無きものとされ、同化され、フランス化されたと信じられている。それは違う。ブルトン人の魂のうちには、なおそれに抵抗する何かがある（……）。それは「民族感情」だ。（……）われわれの認める「祖国」はたったひとつ、ブルターニュだけである。西にあるのは、われわれの敵たちの祖国、すなわちフランスだ。（……）われわれはブルターニュを、フランスに属する一地方としてではなく、独自の「民族」として考える。（……）われわ

れは民族の第一の義務、あらゆる民族国家の原則は、独立であると考える。（……）われわれはわれわれの要求の原則を、以下のような二つの公式で表明するが、共に同一の理念に帰するものだ。すなわち、フランスからの完全な分離、そして「ブルトン民族」の政治的独立である。（……）われわれはブルトン語を唯一の国語とする[1]。

こうしてブルターニュで最初の民族主義的政党が誕生する。しかしその「宣言」の勇ましさとは裏腹に、この政党の実体は少数の学生グループにすぎず、しかも彼らはここで述べられた計画の実現のために何ら具体的なプランを示すこともできなかった。むろん、支持者の数も無に等しかった。

ところで、このとき完成した彫刻家ジャン・ブシェ Jean Boucher の手になる記念碑は、フランス王の前で恭しく跪くアンヌ・ド・ブルターニュの姿を模ったものであった。そしてこの彫像は、一九三二年、秘密組織「グエン・ナー・デュー」Gwenn ha Du によって爆破される。ブルターニュの「独立主義者」による最初のテロ行為だった。そして、ブルターニュの民族主義者が絡んだとされるテロ行為は、これ以後も現在に至るまで断続的に続いている。

もちろん、分離独立を主張する勢力は、今日のブルターニュではごく少数にすぎない。しかしその存在は、確実にここ一世紀ほど、ブルターニュの歴史の「背景」の一部をなしている。そして、先に引用したブルターニュ最初の民族主義政党「ブルターニュ民族主義党」の宣言文こそは、その彼らの思想をもっとも極端な形で代弁するものだったのである。しかしながら、ブルターニュにおけるナショナリズムの表明は、もちろんこれが最初ではない。では、それは、いつ、どのような形で歴史のうちに現われたのだろうか。

ところで、この一九三二年の彫像爆破事件は、それまでほとんど注目されることのなかったひとつの組織を明るみに出した。「ブルターニュ自治主義党」Parti Autonomiste Breton である。この組織のメンバーで、自治主義的政治誌『ブレイ

ズ・アタオ』Breiz Atao の創刊者でもあったオリヴィエ・モルドレル Olivier Mordrel は、『ブレイズ・アタオ、あるいはブルターニュのナショナリズムの歴史と現状』*Breiz Atao ou Histoire et actualité du Nationalisme breton* のなかで、つぎのように語っている。

> われわれの覚醒者のうちで最大の人は、エルサール・ド・ラヴィルマルケだった。彼の『バルザズ・ブレイス』*Barzaz-Breiz* は、学校がわれわれの精神につけた皺をひとつずつ伸ばしてくれた。その歌の数々は（……）半世紀を経たいまもわれわれの人生を支配する感情を、われわれのうちに刻みつけたのだ。（……）われわれが「ケルヴァルケル」Kervarker[2] と呼んでいたこの人は、隣人から何ひとつ教わらずとも、生まれたときから変わることのなかったブルターニュの姿を、われわれに示してくれたのだ。幾世代も前に先祖が失っていた隠れた次元を、明るみに出してくれたのである[3]。

『バルザズ・ブレイス』――テオドール・エルサール・ド・ラヴィルマルケが一八三九年に発表したこの民衆歌集が、ブルターニュのナショナリズム思想の出発点にあるという主張は、このモルドレルの著作のほかにも数多くある[4]。たしかに『バルザズ・ブレイス』は、ブルターニュの自治主義者にとって、一種バイブル的な書物であった。しかしブルターニュのナショナリズムは、なにもこの本によって突然現れたわけではない。それは、十九世紀前半のフランスの政治・宗教・思想上のさまざまな状況の複合的な結果であり、ある意味で必然的な出来事であったのである。

以下、私たちはその脈絡を、『バルザズ・ブレイス』成立までのラヴィルマルケの軌跡を追いながら、ひとつひとつ解きほぐしていく。つまり、何がラヴィルマルケを覚醒させたのか、あるいはなぜそれが彼の身に起こらなければならなかっ

たのか、さらには彼がそれをどのように引き受け、いかなる結果を導きだしたのか、ということを――。

I　反徒の地ブルターニュ

ブルターニュの併合

さて、爆破されたレンヌ市庁舎前の記念碑が象徴していたように、ブルターニュはアンヌ・ド・ブルターニュの死後、一五三二年に事実上フランスに併合され、その独立国としての歴史に幕を閉じた。では、そこに至るまでの国家としてのブルターニュの歴史はどのようなものだったのだろうか(5)。

ブルターニュが、カロリング朝から派遣されたノミノエによって統一され、ひとつのネイションとなるのは、九世紀中葉である。ノミノエの後継者たちは「ブルターニュの王」を名乗り、国家基盤の強化に力をそそぐが、王国はやがてノルマン人の来襲などによって大きく混乱し、十世紀にアラン・バルブトルトが再建するまで権力の空洞化が続く。その後公国となったブルターニュは、十二世紀にイギリスのプランタジュネット朝の干渉を受け、一時はその独立を失う。

一世紀を挟んで、公国は英仏両大国の思惑によって翻弄されるようになる。二十年以上の長きにわたって続いた「王位継承戦争」では、同じブルターニュのなかで、英国に支持された西半分と、フランスを後ろ盾にする東半分とが争った(6)。が、十五世紀になると脅威はフランスに絞られる。この巨大な隣国に対抗する必要から、ブルターニュはその諸制度を整え、近代的な独立国家への道を歩みはじめる。その先導役となったのがアンヌ・ド・ブルターニュの父フランソワ二世であり、ブルターニュはこの時代、ヨーロッパでもっとも豊かな国になった。しかしまた、この頃からフランスによる攻撃はさらに執拗さを増し、彼はその晩年、ついに国の幾つかの特権の放棄を迫られる。

後継者となった娘のアンヌは、生涯に三度結婚し、シャルル八世とルイ十二世という二人のフランス国王の妻となる。彼女は、ルイ十二世との結婚の際、二人の息子を公国の世継ぎにすることを認めさせたが、結局彼女がもうけたのは女子のみで、しかもその長女もまた未来のフランス国王フランソワ一世に嫁ぐことになる。一五一四年にアンヌが、一五二四年にその長女が世を去ると、フランソワ一世はブルターニュ三部会に圧力をかけ、徐々に公国の所有権をフランス国王の側へと引き寄せていく。その結果が一五三二年の併合であった。

しかしこの併合という事実を、今日的なナショナリズムの視点から捉えてはならない。というのも、当時の民衆の間には、現在の愛国心に相当するものなどほとんどなく、帰属意識はせいぜいが自分の住む村や地域にかぎられていたからである。いいかえれば、日常生活に支障がないかぎり、君主が誰に変わろうと、彼らのあずかり知るところではなかった。つまり彼らにとって併合とは、べつに嘆き悲しむべき筋合いのものではなく、むしろ戦乱の終結と平和の訪れを知らせる悦ぶべき出来事であったはずなのである。

しかも、そもそも十世紀のノルマン人の侵入以来、ブルターニュの君主でブルトン語を解する者は一人もおらず、その制度的・文化的背景もほぼ完全にフランスのそれであった。つまりブルターニュのフランス化は、なにもその独立の喪失を機にはじまったものではなく、実際にはそのはるか以前から進行していたのであり、併合はいわばこうした成り行きの必然的な結末にすぎなかったのである(7)。

しかし、つぎの事実だけは確認しておかなければならない。それは、この併合によって、一個の独立国から紛れもないフランスの「辺境」となったブルターニュが、以後その中央集権的な政策によって、さまざまに苦汁をなめさせられ、またときに反抗も企てたということである。そして、おそらくこのことが、いまなおブルターニュにつきまとう「反徒の地」というきな臭いイメージにつながっている。わけても、二つの事件を強調しておかなければならない。ひとつは、コルベー

ルの圧政に端を発した「印紙税一揆」。いまひとつは、大革命後に起きた俗に「ふくろう党の蜂起」と呼ばれる民衆反乱である。

「印紙税一揆」と「ふくろう党の蜂起」

いまではその貧しさで知られるブルターニュも、併合時は、その豊かさで名高かったスペインの植民地の名を借りて「ブルターニュはフランスのペルーである」と言われるほど、恵まれた地域だった。農業はもちろんのこと、産業も繊維業を中心に順調に発展を続け、商工業もまた空前の好況を迎えていた。英国との緊密な交渉の必然的な結果として、海運も栄え、一五三四年、サン・マロを出発したジャック・カルティエ Jacques Cartier はカナダを発見する。各地の小教区では競うように教会が建てられ、イエスの生涯を石像で辿るカルヴェールをはじめとする、ブルターニュ独自の民衆芸術が花開いた。この繁栄は、やがて起こる宗教戦争によって中断されながらも、十七世紀末まで続く。

そのブルターニュに打撃を与えたのがコルベールだった。このルイ十四世の財務総監にとって、ブルターニュは徹底的に搾取すべき植民地だった。彼は不正な補助金をゆすり取り、王室の金庫を富ませるために気まぐれな勅令を乱発した。たとえば一六六四年には、戦艦の建設のために大量の森を伐採しなければならないという理由で、木材の暖房への使用を禁止した。また一六七三年にブルターニュ三部会が印紙税の廃止を申し出ると、逆に印紙に税金を課した。しかも、貨幣の量が国力を決定すると説く「重商主義」を奉ずる彼は、輸入を抑え輸出を増やそうとした。その結果、英国からの毛織物の輸入を停止したが、英国は報復としてフランスの繊維製品に港を閉ざした。打撃を受けたのはブルターニュの繊維業だった。

そんなとき、ルイ十四世が塩税を課すという噂が流れる。根拠のない噂だったが、これで民衆の怒りが爆発する。一六

七五年、レンヌで蜂起が始まると、同様の暴動はナントに、さらにはバス・ブルターニュ地方にも波及する。これが俗に「印紙税一揆」あるいは「赤帽子の乱」と呼ばれる反乱である。権力側の弾圧は厳しかった。フランス軍が町々を襲い、人々を拷問にかけ、何千という農民が縛り首にされた。大革命に先立つこと百年、ブルターニュで起きた本格的な民衆反乱であった。

ところで、いまひとつ、俗に「ふくろう党の蜂起」と呼ばれる反乱は、まさにその大革命に端を発したものだった。この反乱の背景には、革命後の税制・経済改革への不満、農村共同体の破壊への危惧など、ブルターニュ特有の事情が複雑に絡み合っていたが(8)、ここでとりわけ強調しておきたいのは、この土地特有の熱心なキリスト教信仰である。歴史的に見て、ブルターニュはフランスでもっともキリスト教信仰が盛んな土地のひとつだった。それは、古くはドルイド教の土台の上に築かれたこの地方独特の教会組織、新しくは十七世紀におけるモノワール神父による伝道活動の影響でもあったが、なによりもその言語が、フランス語圏では早くから起こっていた世俗化の波に対して、強力な防波堤の役目を果たしたことが大きかった。この関係は、とりわけ十九世紀に流布した「信仰とブルトン語は兄弟姉妹である」という言い方に、たぶんもっともよく表されている(9)。

が、大革命後、そのブルターニュにも大掛かりな習俗・文化の非キリスト教化の波が襲う。「聖職者民事基本法」をはじめとする政府の極端な反カトリック政策は、それまで司祭を中心にして安定した共同体生活を営んできた農村地帯に、大きな不安と混乱をもたらした。こうした状況の下、ブルターニュの各地で、農民たちによる激しい抵抗運動が起きる。反徒たちがモリフクロウの鳴き声を真似て合図としたことから「ふくろう党の蜂起」と呼ばれるこの反乱は、農民は大革命に好意的であったという革命史の通説に対し、貴重な例外を提供している。

蜂起は一七九三年にはじまり、一七九六年に至るまで散発的に繰り返された。反乱は大隊を組んでのものではなく、ゲ

リラ戦であった。しかも、ボカージュと呼ばれる独特の地形をもつブルターニュは、こうした戦にはうってつけであった。ところで、この反乱は一般に王党派によるものという定説がある。しかし実際には、反徒たちの要求は王政復古にはなく、この点でそれはカペー朝の再興を目指して激しい戦闘が交わされた、いわゆる「ヴァンデの乱」とはまったく性格を異にしている。

しかしこの二つの反乱は、その地理的な近接性から、しばしば混同された。そのため、十九世紀のブルターニュには、暴動の多発する危険地帯という評判が定着することになる。もちろん、バルザックやヴィクトル・ユゴーなどの流行作家が、こうした反乱を題材に小説を書いたことも大きかった。いずれにせよ、独自の民衆文化を頑迷に守り、ときには国家への抵抗も辞さない、誇り高き「辺境」としての近代ブルターニュのイメージは、実際には多少なりともこうした経緯のうちに淵源しているのである。もっともすでに指摘したように、その実情は「ブルターニュ対フランス」などという近代的なナショナリズムの図式とはほど遠いものであった。

しかし、だからといって、この地に「ナショナル」な意識がなかったわけではない。それどころか、ブルターニュの支配階級のうちには、大革命のはるか以前から、かなり強固な国家意識が存在していたのである。以下、少しばかりその歴史を辿ろう。

Ⅱ　ケルトの地ブルターニュ

トロイア人起源説

今日のブルターニュは、アイルランド、ウェールズ、コーンウォール、スコットランドとともに「ケルト圏」と呼ばれ

る地域を形成している。この土地が、五―七世紀にブリテン島から移住して来たケルト人をその先祖とすることは、今日では広く知られているし、またそこを訪れる観光客にとっても、毎夏各地で開催される「ケルト祭」や、民族衣装で楽器を演奏したり踊りを披露したりする「ケルティック・サークル」等の存在によって、ブルターニュとケルトの名は、すでに切り離すことのできないものとなっている。しかしあまり知られていないことだが、実はこの地方がケルト人の末裔を名乗りはじめるのは、たかだか十八世紀のことにすぎない。しかもそれ以前には、ブルトン人はケルトならぬトロイア人の末裔を自認していたのである。以下、少しその歴史を見よう(10)。

ブルターニュの歴史書や年代記は、九世紀頃から、ブルトゥス Brutus なる人物をブルトン人の先祖として語りはじめる。それによると、この人はトロイア戦争の英雄で、ローマの建国者ロムルスの祖先アイネイアスの曾孫だったが、父殺しの罪でイタリアを追われ、やがてブリテン島に漂着し、そこで王となったのだという。むろんブリテンという名も、このブルトゥスに因んだものなのである。

さらに、十一世紀頃から、この伝説にはいまひとつコナン・メリアデック Conan Mériadec なる名前が加わるようになる。先のブルトゥスがブリテン島の王であったとすれば、この人物こそはブルターニュの最初の王であり、四世紀末にブリテン島から渡来し、皇帝マクシムスとともにアルモリカを征服したというのである。

今日、この二人の名は完全に忘れられている。また、われわれ現代人の目からすれば、どちらの伝説も荒唐無稽の観を免れない。しかし、いまでは奇矯に思えるこうした起源神話も、ブルターニュでは、少なくとも大革命前後までは大真面目に主張されていたのである。というよりもむしろ、起源を神話によって正当化することは、国家の威信に関る重要なプロセスだったのである。いうなれば、ブルトゥスとコナン・メリアデックは、他国との競合のなかにあって、ブルターニュのアイデンティティーを保証するシンボルだったのである。

実際、この二人を背後で支えていたのは、トロイアとローマという二つの威光であった。そして、その起源には、いうまでもなくウェルギリウスの『アエネイス』*Enéide* があった。この長編叙事詩は中世初期の修道院で絶大な権威を誇っており、この時代、ヨーロッパ諸国の起源神話は、まずここにその発想を汲むのが常道だった。そして、この叙事詩でローマ建国の遠祖とされたアイネイアスは、またヨーロッパの起源となる人物とも考えられていたのだった。いずれにせよ、この時代、祖先がトロイア人であると主張するのは、何ら奇妙なことではなかったのである。その証拠に、この神話はその後何世紀にもわたって維持されるほど強い生命力をもった。

ブルターニュが独立した国家であったときには、こうした起源神話にもとくに問題はなかった。しかし、この国がやがてフランスに併合され、その一州となると、さすがにそれも維持し難いと考える人間が出てくるようになる。いうまでもなく、フランスはフランスでまた別の起源神話があったからである。

ガリア起源説

ブルターニュが独立を失った十六世紀、とりわけその後半のフランスは、知られるように政治・宗教の両面における激しい混乱の時期であった。打ち続く戦乱から国家の基盤は不安定になり、フランスは分裂の危機にあった。こうしたなかで、自国の歴史的起源を再確認し、その国家としての統一を回復しようという動きが起こりはじめる。そして、このとき起源として示されたのは、ガリアであった(11)。

こうした風潮のなか、ブルターニュの歴史家ベルトラン・ダルジャントレ Bertrand d'Argentré は、『ブルターニュの歴史』*Histoire de Bretagne*（一五八二年）を著し、ブルトン人はブルトゥスのはるか以前からガリアの民だったのだと主張した。彼らの先祖はブリテン島からの渡来人ではない。大陸から島に渡ったのは、逆にブルトン人なのであり、実はウェー

ルズ人こそが彼らの子孫なのだというのである。こうして彼は、永らく疑われることのなかったブルトゥスの神話を、ブルターニュの歴史から追放する(12)。しかしそのダルジャントレも、コナン・メリアデックについては、ブルターニュの独立の象徴として支持した。そして、このブルターニュ初代王の神話は、以後さまざまな紆余曲折を経ながらも、十九世紀まで生き延びることになる。

ところでダルジャントレは、自らの仮説を証明するに当って、言語学を手段とした。これは以後起源神話の常道となる画期的な方法だった。当時のフランスでは、古のガリア語の性質に関して盛んに議論が交わされていた。そしてダルジャントレは、幾つかの語彙の語源を遡りつつ、それはブルトン語であると答えた。彼によれば、この言語はほかの言語の影響を受けることがなかったからこそ、純粋で混じり気のない「真のガリア語」を保存し得たのである。

こうしてダルジャントレは、失われたブルターニュの政治的独立を補償するかのように、高らかにブルトン語の「独立」を宣言する。時あたかも、一五三九年の王令「ヴィレール・コトレ法」によって、公文書におけるフランス語の独占的な使用が定められ、まさに国家と言語の一体化がはじまろうとしていた時代であった。

もっとも、ブルターニュの起源をガリアに求めるこのダルジャントレの仮説は、広く受け容れられるにはほど遠かった。ブルトン人の先祖はトロイア人であり、ブルトン語はトロイア系の言語であるという考えが、やはり当時の大勢だったのである。続く十七世紀、ブルターニュは自国の歴史に関して見るべき成果を生まない。が、しかしこのダルジャントレの著作は、忘れ去られることなく、幾度か再版される。そして、その言説は十八世紀に入るや再評価され、ブルターニュの歴史家に大きな影響を与えることになるのである。きっかけとなったのは、一七〇三年、ブルターニュはエンヌボン出身のポール・ペズロン Paul Pezron が著した一冊の書物であった。

ケルトの地ブルターニュの誕生

パリ大学の神学者で、シトー会の司祭であったペズロンは、その晩年に『ケルト人、別名ガリア人の民族と言語の古き時代』*Antiquité de la nation et de la langue des Celtes autrement appelez Gaulois*（一七〇三年）という書物を出版した。彼はそこで、フランス人の祖先はアジアから来たガリア人、すなわちケルト人であり、しかもその言語は「四千年以上の転変の時を越えて、われわれのもとにまで伝えられたのだ」と主張した。その言語とは、ほかならぬ、「今なおフランスのブルトン人やイギリスのウェールズ人が話している言語[13]」なのであり、この言語こそは、その歴史において、聖書の言語、すなわちヘブライ語にも比すべきものだというのである。彼は言う。「われわれがいま「ブルトン」の名で呼んでいる、ケルトあるいはガリアの言語こそ、「始原」の言語なのである[14]」。

こうしてペズロンは、ブルトン語とウェールズ語に[15]、フランス語はもちろんのこと、ラテン語をも凌ぐ地位を与えた。しかもペズロンの肩書にあったシトー派の学者という「権威」が、この説の広範な受容をあと押しした。実際、彼の本は三年後には英訳され、イギリスでも評判を呼ぶのである。こうして、それまで「ちんぷんかんぷんな言葉」baragouin[16]として日陰に追いやられてきたブルトン語は、由緒正しき高貴な言葉の仲間として、一躍脚光を浴びることになった。

こうした風潮に、ブルターニュの学者たちが反応しないはずはなかった。実際、十八世紀前半、この地の歴史学は空前の活況を呈することになった。なかでも『ブルターニュの歴史』*Histoire de Bretagne*（一七〇七年）の著者、ギー・アレクシス・ロビノー Guy-Alexis Lobineau は、コナン・メリアデックの神話に疑問を呈し、それまでブルターニュの特殊性を強調していた歴史学の議論を、フランスの一州としてのブルターニュを考える方向へと大きく転換させた。しかもダルジャントレの影響を強く受けたロビノーは、先輩と同様、大陸のブルトン人こそブリテン島のケルト人の祖先であるという説を信じて疑わなかった。そして彼は、二つの民族の起源が同じである以上、この両者はもともと同一の言語と宗教を

共有していたはずだと主張したのである。ロビノーは言う。「バス・ブルトン人がウェールズ人と話すとき、通訳はいらなかった[17]」。

この言葉は、以後ブルターニュの知識人の間で固定観念のひとつとなるだろう。

ケルトマニア

こうして、十八世紀後半、ブルトン語は、いわばブルターニュの歴史的起源を保証する生き証人として、その起源神話の形成に不可欠な要素となった。ところで、こうした傾向がもっとも極端な形で現れるのが、つぎに述べる二人、すなわちジャック・ルブリガン Jacques Le Brigant とラトゥール・ドーベルニュ Théophile-Malo-Corret de La Tour d'Auvergne である。十九世紀になって、常軌を逸してケルトに固執する人々を呼ぶ「ケルトマニア」という名前が生まれるが、彼らこそまさにその名に相応しい人たちだった。もっとも、そうした評価が生まれるのは、あくまでも後世の話であり、生前、その仮説はかなりの信憑性をもって受け取られたのである。

ルブリガンは、ブルターニュ中北部ポントリゥーの生まれで、ブルターニュ高等法院の弁護士だった。彼の関心はひたすら人類最初の言語、すなわち「始原の言語」の探求にあった。そして「単音節語が多い言語ほど始原の言語に近い純粋な言語である」という当時の通説にしたがって、ブルトン語こそまさに人類最初の言語であり、世界中のすべての言語はこの言語で語源的に解釈できると主張した。

それによると、たとえば「ヨーロッパ」は、ブルトン語の「エ・ヴロ・ペン è vro pen」、すなわち「その・地方・端」に由来することになる。つまり、彼が依拠していたのは、対象となる単語を音節に分解し、そこに単音節のブルトン語を当てはめるだけという単純きわまりない方法だった。しかしルブリガンはこの方法に絶対の自信をもち、あろうことか、

当時始原語の存在を否定していたヴォルテールに対して、バス・ブルトン語を学ぶよう忠告しさえしたのである。

もうひとりのケルトマニア、すなわちラトゥール・ドーベルニュは、ブルターニュはカレー生まれの軍人だった。しかも、第一執政官ナポレオンから「共和国第一の精鋭兵」の称号を贈られるほど、その方面で大きな功績を残した人物だった。が、その一方で、職業柄、異国に足を踏み入れることの多かった彼は、早くから言語への関心に目覚めて数カ国語を習得し、母語のブルトン語をはじめとする言語研究にも手を染めていた。ルブリガンを師と仰ぎ、のちにはその末息子の徴兵に身代わりを買って出たほど親密な間柄であった。彼の著作は、華々しい軍人としての栄誉によって愈々その信頼を高め、とくにその死後、大きな影響力をもった[18]。

そのラトゥール・ドーベルニュが一七九二年に発表したのが、『ガリアの起源』*Origines gauloises* である。彼はそこで師の理論を踏襲しつつ、比較言語学的な手法によって「ケルト語はヨーロッパとアジアのすべての言語の母である[19]」と結論し、「アルモリカのブルトン人こそ、その昔ヨーロッパ大陸にいたケルト人の真の子孫なのである[20]」と主張した。

ところで、ラトゥール・ドーベルニュは、ブルトン人のなかでひとつの階層を特権化した。「農民」である。彼らは文明に汚されず、素朴なブルトン語を話し、いまだに昔ながらの素朴な生活を送っているがゆえに、真のガリア人の子孫としての栄誉に浴するのである。すでに見たように、それまでの起源神話は、支配階級の名誉のために構想されるのが普通であった。農民を顕揚するための起源神話というのは、前例のないことだったのである。その点でこの書物は、それまでもっぱら権力者の道具として政治的に利用されてきた起源神話の歴史に、ひとつの断絶を印すものであった。

いずれにせよ、ラトゥール・ドーベルニュの書物は、結果として、しばしばその言語ゆえに蔑まれてきた農民の世界に、大きな名誉を与えることになった。なによりも、それによって、それまで彼らに付与されてきた「原始的」「粗野」「野蛮」といった言葉が、もはや単なる蔑称ではなく、逆に古代文明とのつながりを示す証として、一気にポジティヴな意味をも

つことになったのである。しかしそれはまた、十九世紀を通じて飽かず反復されるブルターニュにまつわるステレオタイプの誕生でもあった。

Ⅲ　行政調査からフォークロアへ

二重民族説と『オシアン』

ところで、ラトゥール・ドーベルニュの農民崇拝は、必ずしも彼の独創ではなかった。その裏には、当時流行していたひとつの思想、そしてなによりも一冊の書物があった。まずはその思想、すなわち「フランス人二重民族説」から触れることにしよう。

そもそもこの説を唱えたのは、ピカルディーの旧家の出身のブーランヴィリエ伯爵 comte de Boulainvillier だった。先に見たペズロンの著作の出版からわずか数年後のことである。彼は『フランス古代統治史』*Histoire de l'ancien gouvernement de la France*（一七二二年）において、フランスにおける貴族と平民の区別の根拠を、フランク人によるガリア支配に求めた。つまり、貴族はフランク人、平民はガリア人の子孫で、その階級差は征服者と被征服者という立場の相違から生まれたというわけである。階級を歴史的に実体化し、貴族的特権の正当性に恰好の論拠を与えるこの説は、フランスはフランク人の国なのか、ガリア人の国なのかという問いに姿を変え、その後多くの議論を呼んだ。大革命はこの議論に一応の決着をつける。フランスはいまや公明正大にガリア人の国になったのである。シェイエス Sieyès は名高いパンフレット『第三身分とは何か』*Qu'est-ce que le tiers état ?*（一七八九年）のなかで、「なぜ自分たちが征服者の末裔だと下らぬ主張をしていた人々を、ひとまとめにゲルマンの森に追い返さないのか」とまで言うだろう。オーギュスタン・

ティエリ Augustin Thierry やフランソワ・ギゾー François Guizot も、やがて大革命を民族闘争として捉えるようになるだろう[21]。つまり、先に見た農民をガリア人の代表へと昇格させるラトゥール・ドーベルニュの発言は、こうした時代背景を考慮に入れれば、けっして突飛なものではなかったのである。

ところで、ここにもうひとつ、一冊の書物をつけ加えなければならない。ジェームズ・マクファーソン James Macpherson の『オシアン』*Poèmes d'Ossian*[22] である。知られるように、十八世紀中葉にスコットランドの無名の一青年が出版した、この自称「ケルトの古詩」は、その怪しげな出自にもかかわらず、十八世紀後半のヨーロッパを文字通り席捲し、それまでフランス古典主義という貴族的な美学を唯一の模範としてきたその文化的風土を一変させた。ここで前景に出てきたのは、農村や田園、廃墟や原野という、華美や洗練とはおよそ相容れない原初的な風景であった。主役はいまや農民となったのである。その意味で、先のラトゥール・ドーベルニュの書物は、この全ヨーロッパ的な「オシアン現象」がブルターニュの起源神話に残した、ひとつの痕跡だったと言えるかもしれない。

ともあれ、この書物の影響は大きかった[23]。ナポレオンが愛読し、ゲーテが心酔したことは夙に知られているが[24]、この歌集はなによりもヨーロッパ全体に民族的叙事詩への関心を呼び醒ました。とりわけ、当時国民概念が形成されつつあったドイツに与えた衝撃は大きく、ドイツ・ロマン派の理論家ヘルダー Johann Gottfried Herder は、その影響下で「真の文学は民族の声である」と力説し、積極的に民衆歌の収集を呼びかけ、自ら世界各国の民衆歌を集めて翻訳・出版さえした。

ところで、こうした文学者たちにとって、『オシアン』はまたフランスの圧倒的な文化的支配に抵抗するための手段でもあった。当時のヨーロッパはフランス古典主義の強い影響下にあり、文学者はしばしば自国語ではなくフランス語でものを書きさえした。『オシアン』はこうしたフランスの文化的専制にたいする有力なアンチ・テーゼとなったのである。そしてその影響は、攻撃の矛先が向けられた当のフランスでも、次第に無視できないものとなってきた。

一七七七年、ヘルダーはすでにこう言っていた。「われわれが永らく模倣してきたフランス人が、有難いことにも、ふたたびわれわれを模倣し、実は彼ら自身の屑物であったところのものを食するようになった今（……）、ああ、われわれは今、何たる人民だろうか[25]」。

カンブリーの旅行記

ところで、大革命を経たのちも、フランスでは支配階層と民衆の溝は、それほど狭まることはなかった。つまり、この国は高邁な「国民主権」の理想を掲げたものの、その「国民」の実体については、相変らずほとんど無知のままだったのである。こうして革命後の中央政府にとって、まずは民衆の実情を把握することが至上命令となる。手段とされたのは、統計調査であった。それは大革命後の新たな行政区分である「県」を単位に、中央政府から派遣された強大な権限をもつ知事のもとで、組織的におこなわれた。そこでは、言語、人口、税金収入、産業・技術の実態、物乞いや浮浪者、民衆の風俗・習慣・服装、等々、文字通り多種多様な事柄が調査の対象となった。

ところで、このとき知事の片腕としてフィールドに赴いたのは、地方の名望家たちであった。調査書を片手に民衆のなかへと入っていった彼らの所期の目的は、もちろん国民の統制と管理にあった。しかし調査の過程で、その彼らのうちに、本来の目的とは別のところで、民衆文化そのものに対するポジティヴな関心が芽生えてくるようになる。いうなれば、この行政調査は、支配階層が民衆文化に直に接する格好の機会を与えたのだった。

こうした風潮のなかで、ブルターニュに一冊の旅行記が現れる。当時カンペルレ地区議会議長だったジャック・カンブリー Jacques Cambry が著した『フィニステール県旅行記』*Voyage dans le Finistère*（一七九九年）である[26]。この書物は、一七九四年から翌年にかけて、著者がブルターニュの西端フィニステール県の内陸部を旅したときの記録をもとに書かれ

たもので、当初は「フィニステールにおいてヴァンダリスムを免れたもののカタログ」というタイトルで官庁に提出された。しかし、当時の民衆の習慣や生活を生き生きと記述したその内容は、たんなる官庁文書の枠をはるかに越えて、いまなお読む者の心を捉える清新な魅力に満ちている。

著者のカンブリーは、一七四九年、東インド会社の造船技師を父に、モルビアン県の港町ロリアンで生まれた。父親がパリの生まれであったため、ブルトン語は片言しか話せず、旅行中は傍らに通訳が同行したという。裕福な家庭に育ち、すでにヨーロッパのあちこちを旅していたこの旅人は、そこに「フランスのほかの地方よりは、オーストラリアや、ホッテントットやメキシコのそれに近い、多くの習俗[27]」を発見してまず驚くが、やがてこの古い土地の魅力の虜となり、最晩年には自らドルイドに扮して、そのポートレイトを描かせるまでになる[28]。

ところで、カンブリーの記述はたしかに生彩に富んだものであったが、そのすべてが信頼できるものとは言えなかった[29]。啓蒙思想の大きな影響を受けた彼には、ブルターニュの古い習俗はほとんど迷信の集積にしか見えなかった。が、彼が描く信仰心に凝り固まった、貧しく、頑迷なブルトン人の姿は、バルザックやミシュレにもそのまま踏襲され、十九世紀を通じて無視できぬ影響力をもった。しかもカンブリーにあって特徴的だったのは、そうしたブルトン人に対する否定的なイメージが、いったんその歴史の古さに結びつけられると、いきなりポジティヴなものに変わることだった。

たとえば、ブルトン語に対する彼の態度である。ルブリガンやラトゥール・ドーベルニュの愛読者であった彼にとって[30]、ブルトン語とは恥ずべき田舎の言語ではなく、紛れもなく「始原の言語」であり、誇るべき貴重な遺産であった。カンブリーは言う。「古代世界のもっとも古い賞牌であるブルトン語やケルト語を蔑ろにして、それを滅ぼそうとするのは、野蛮なことである[31]」。あるいはまた、「ブルトン人は世界中の言語のなかでブルトン語の卓越性を確信しているが、私はそれが彼らの自惚れが強すぎるせいだとは思わなかった[32]」。

つまり、ブルターニュという原始の土地のなかで、貴重な歴史的遺物を探すこと。これがカンブリーの旅の、表には出てこない真の目的だった。そしてまた、こうした意図においても、やはり『オシアン』の与えた影響は大きかった。実際、彼は旅の途中で、オシアン風の多くの古歌に出会うものと期待していたのである。しかし、残念ながら、成果は乏しかった。彼は失望して、こう書いている。

太古の偉大な歌は、バルドの没落とともに消えてしまった。私は方々を調べたが、人々の記憶の中にも、過去の写本の中にも、われらが祖先たちを勝利に導いたあの壮麗な歌を見つけることはできなかった。大西洋上や海岸で、戦の最中に、無敵の民族によって歌われていたあの荘厳な賛歌を、ギリシャ・ローマの作家たちが、その音が雷鳴や荒れ狂う海のそれにも似ていたと語るあの歌を。こうした詩歌は、ブルターニュでは、ドルイドの崇高な宗教の破壊を望んだ司祭たちによって、根絶やされてしまったのだ(33)。

しかし、この失望も、彼のさらなる探求を妨げはしなかった。カンブリーは一八〇四年秋、仲間とともに、ケルト人の歴史の解明を目的として、ひとつの研究組織を結成する。それが、フランス最初の民俗学的学術団体「ケルト・アカデミー」Académie celtique である。

ケルト・アカデミー

ケルト・アカデミーの設立大会は、一八〇五年三月、パリのルーブル宮の一角で開かれた(34)。会員となったのは、おもにブルターニュやパリの学者やいわゆる好古家たちで、その筆頭に祀られたのは、誰あろう、故ラトゥール・ドーベルニュ

であった。

ところで、この会の設立に中心的な役割を演じた人が、カンブリーのほかに二人いた。エロワ・ジョアノー Eloi Johanneau とミッシェル・アンジュ・ド・マングーリ Michel-Ange de Mangourit である。ジョアノーはコレージュの教師であったが、友人ラトゥール・ドーベルニュの影響により、文献学と古代ケルトに大きな関心を寄せていた。ケルト・アカデミー設立のきっかけは、イギリスには数多くある考古学協会がフランスにはまったくないことに対する、このジョアノーの不満であったと言われている(35)。一方、マングーリは外交官で、一七八九年に革命派の新聞の走りとなる『エロー・ド・ラ・ナション（国民の伝令官）』*Héraut de la nation* を創刊した人物として知られていたが、また活発なフリーメーソンの会員でもあった。そして、彼のみならず、フリーメーソンの会員たちは、ケルト・アカデミーにおける一大勢力を形成していた(36)。

一八〇七年、ケルト・アカデミーは、最初の『研究報告』*Mémoire de l'Académie celtique* を刊行し、それを皇后陛下に献じた。このアカデミーの会長で、「フランス記念碑博物館」Musée des Monuments français の館長でもあったアレクサンドル・ルノワール Alexandre Lenoir は、その献辞にこう書いた。「ケルト・アカデミーを設立させたのは、ケルト人、ガリア人、フランク人が、その末裔に伝えた数々の栄光を見つけ、集めようという願望である。かくも気高く国民的な感情が生まれてきたのは、いまフランス人がその先祖に相応しいものとなっているからに相違ない(37)」。つまり、フランスは「一連の目覚ましい勝利によって、かつてのガリア人の領土を奪回したのみならず、それ以上のものをも手に入れたのである(38)」。

この発言からも明らかなように、ケルト・アカデミーの設立の背景には、紛れもなくナポレオンの海外拡張政策があった。先にも述べたように、ナポレオンは『オシアン』を熱愛しており、その入れ込み様は、自らオシアン風の絵画を注文

し、自邸に飾るほどであった。しかもフランスの若者たちは、ナポレオンの征服行為を、オシアン風の叙事詩になぞらえてもいた[39]。つまりこの時代、ケルトを讃えることは、ある意味でナポレオンを讃えることでもあった。実際、ケルト・アカデミーはナポレオンの皇帝への即位とともに生まれ、その退位とともに姿を消す。その意味で、この団体は第一帝政期という特殊な時代の産物であったと言えるかもしれない。

ところで、この団体は具体的に何を目指していたのか。それはつぎの二点に要約される。まずは、「ケルト人の歴史をつまびらかにし、その遺構を調査・点検・検討し、説明すること」。いまひとつは、「ケルト・ブルトン語、ウェールズ語、スコットランド・ゲール語を援用して、ヨーロッパのあらゆる言語の語源を明らかにし、公表すること」である[40]。つまり、ジョアノーが簡潔に表現したように、「ケルトの言語と古代の研究[41]」こそがこの会の主旨であり、彼らの使命は、それまで何世紀にもわたってケルトとガリアを軽視してきた歴史の誤謬を正すことだったのである。

そのための調査方法として、彼らはまず習俗・慣習・迷信などを対象に、五十一項目にわたるアンケートを作成した。これは、その後も民俗学調査において模範となる画期的なものだった[42]。このアンケートは、行政調査の場合と同様、各県の知事を通して、土地の名望家の手に渡された[43]。こうして寄せられた回答が、ケルト・アカデミーの会合における報告や『研究報告』の論考のもとになった。つまりその調査方法は、全国に広がるインフォーマント網を頼りにしたものだったのである。

ところで、こうして収集されたフランスの民衆文化の諸断面は、それがいかに奇妙で、非合理的なものであろうと、ケルトの古代へと結びつけられることによって、その存在を正当化された。しかし、彼らがケルトマニアと揶揄されたことからも分かるように、その主張は多くの牽強付会に満ち、ときにあまりに素朴にすぎ、また荒唐無稽ですらあった。たとえばケルト・アカデミー解散後、その会員の一部によって新たに創設された「フランス王立考古協会」Société Royale des

Antiquaires de France の『研究報告』第一号に掲載されたつぎの文章は、その活動を間近で見た同時代人の記録として興味ぶかい。

主だった会員たちがケルト人について抱いていた考えは、面白いものではあったが、実質をともなってはいなかった。彼らはこの民族について歴史が与えてくれる知識のうちに、自分の考えを支える十分な証拠を見いだすことができなかった。こうして彼らは、果てしない推測のなかに、不確実で誤謬に満ちた場所へと身を投げ入れてしまったのである。彼らによれば、ケルト人は学問・芸術・文化の粋をきわめるレベルにあったのだという。また彼らは、ブルトン語がケルト人の話していた言語だなどとも主張していたが、怪しいものである(44)。

こうして、フランスでは、以後ケルトマニア的な言説は珍しいものになる。民衆の風俗習慣に関する公的な調査も、一八三〇年頃を境に見られなくなるだろう。しかしケルトに対する関心が、これで終わりになったわけではない。それどころかフランスでは、この頃から「我らが祖先ガリア人」という言い方が大衆化するようになる。時代は、国民国家としての結束を強固にする必要から、民衆レベルでガリアを起源として要請するようになっていたのである。

ところで、このケルト・アカデミーが解散した一八一五年、ブルターニュの片田舎で、のちにフランスのケルト学に大きな影響を与えることになるひとりの人物が産声を上げている。『バルザズ・ブレイス』の著者ラヴィルマルケである。

Ⅳ　幼少期のラヴィルマルケ

貴族の末子

テオドール・クロード・アンリ・エルサール・ド・ラヴィルマルケ Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué は、一八一五年七月六日、コルヌアイユ地方南西部カンペルレの貴族の家に生まれた。父ピエール・エルサール・ド・ラヴィルマルケ伯爵は長く代議士をつとめたが、一八二八年に隠退し、その後はもっぱら土地の貧民層の救済のために力を尽くしたという。兄一人、姉六人の末っ子で、母はラヴィルマルケを生んだときには、すでに四十に近かった。この少年がさぞや母親の強い愛情を受けて育ったであろうことは想像に難くない。

ところで、ラヴィルマルケは幼少期の大半を、カンペルレから西方約十五キロのところにある母方の土地プレシ・ニゾン Plessix-Nizon の屋敷で過ごした。自然に恵まれた穏やかな環境だった。彼の母はこの場所をこう紹介している。

> プレシ・ニゾンの屋敷には、一四四一年にこの名を名乗る領主がやって来て住みついたのです。山懐に抱かれた森のなかにありましたので、訪れる人はこんなところにほかに人がいるのかと思うかもしれません。でもこの土地には、ブルターニュを蹂躙する内乱の惨禍を逃れて生活する穏やかな人々が住んでいました。戦よりは農耕を好んだプレシ・ニゾンの領主は、善良で慈悲深く、近隣の人々を大切にしておりましたので、周囲ととても仲良くやっていました。（……）私はこの勇敢な騎士たちと、母方でつながっておりました。田舎ですし、洗練されてもおりませんが、私は母が住んだこの土地が好きです。（……）エナンからポンタヴェンへ、アヴェン川の流れに沿っていくと、ポンタヴェンの村に出ます。ここはその立地条件から、スイスでもっとも風光明媚な場所に比べられています。その橋、その川、たくさんの

水車、それにポプラの木が、このうえなく美しい一幅の絵をつくっているのです[45]。

自分が住む土地を誇るこのラヴィルマルケの母の言葉に、誇張はなかった。実際、現在でもブルターニュでもっとも美しい村のひとつに数えられるこのポンタヴェンの風景は、十九世紀半ばから、国籍や出身を異にする多くの画家たちを惹きつけ、この小村を芸術家の一大コロニーにした。パリでの生活に疲れたポール・ゴーギャンは、タヒチに旅立つまでの八年間をここで過ごし、名高い「黄色いキリスト像」をはじめとする多くの作品を残すことになるだろう。また、のちにポンタヴェン派と呼ばれることになる後期印象派の一群の画家たちも、この村の北部の丘陵地帯に広がる森から多くのインスピレーションを受けることになるだろう。そして、ラヴィルマルケが幼年時代を過ごしたプレシの森は、彼方で、このポンタヴェンの背景をなす森の一部とつながっていたのである。父の死後、その伝記を書いた息子ピエールはこう言っている。「今日ポンタヴェンは芸術家や観光客を溜まり場になっているが、この小さい町はその評判の一部をプレシの雑木林や森林の近隣に負っているのである[46]」。

ブルトン語と「アーサー王ごっこ」

ところで、ラヴィルマルケの述懐によれば、八歳のとき、彼はブルトン語しか話さなかったという。実際、息子ピエールによれば、当時プレシ・ニゾンの農民たちが話していた言語は、ブルトン語のコルヌアイユ方言のみであったらしい[47]。そして、少年時代のラヴィルマルケの遊び相手は、そうした農民の子供たちで、もちろん彼らが話す言葉もブルトン語であった。したがって、彼が幼い頃からこの土地の言葉に親しんだのも、当然と言えば当然のことだったかもしれない。

もっともこうした習慣は、一国一言語主義が浸透してからのフランスの常識からすれば、かなり異例なことと言わなけ

ればならない。しかしこの時代には、たとえ貴族の家柄であっても、子供に方言の使用を禁止するようなことはほとんどなく、ラヴィルマルケの母親もそういうことを気にするような人ではなかった[48]。

しかし、家ではどうだったろうか。オート・ブルターニュ地方の旧家の血を引く父親は、おそらくブルトン語を知らなかった[49]。家族の会話がフランス語なしで成立していたとは考えにくい。おそらくラヴィルマルケにとって、故郷を出るまでは、土地言葉を中心としたフランス語との二カ国語併用が日常であったはずである。実際、彼はのちにこう回想している。「コレージュでは、フランス語よりも先にブルトン語が出てしまうことがあった[50]」。

ところで、ラヴィルマルケはその著作のなかで、この子供時代の逸話として、ひとつの興味深い話を残している[51]。それは、当時子供たちの間で「アーサー王ごっこ」という遊びが流行ったというのである。これはどのような遊びだったのか。彼の母はこう説明している。

> アーサー王役の人が、居間のいちばん立派な肘掛け椅子に腰掛けます。椅子は真中に置かれています。ひとりがロウソクをもち、椅子の周りを深々とおじぎをしながら三度回ってこう言うのです。「三度ご挨拶致します、アーサー大王様、黙って、黙って、黙って[52]、と三度言いながら」。アーサー王は絶対に黙っていなければなりません。でも、挨拶する人が笑えば、その人がアーサー王役と交代します。笑わなければ自分の席に戻ります。こうして王は挨拶する人が笑うまで椅子に座っていなければならないのです[53]。

たわいない遊びではある。しかし、この時代にブルターニュの片田舎で、アーサー王の名が当たり前に子供たちの口に上っていたということ、また将来アーサー伝説と深くかかわることになるこの未来のバルドが、幼少期からこの王の名に

親しんでいたということは、ここで記憶されてもいいかもしれない。

収集家の母

さて、これまでもしばしばその文章を引用してきたように、ラヴィルマルケの母親には、日常生活のさまざまな事柄を好んで書き留める習慣があった。しかもこの「ニゾンの奥方」は、貧者たちに対して医療行為を行っており、自分が施した薬や治療法などを日記風に記録していた。そして、そうしたノート類にはまた、当時ニゾンの周辺で民衆によって謡われていた歌も書きつけられていた(54)。それはブルターニュにおける民衆歌謡の収集のなかで、もっとも早い貴重な記録となった。息子エルサールは、のちに『バルザズ・ブレイス』第三版の「序文」でこう語るだろう。

> たぶん最後となるであろうこの版を出すにあたって、最初の頃と変わらぬ魅力をたたえるこの書物を、私が生まれるはるか以前に歌の収集をはじめ、その歌で幼年時代の私を魅了した人、私にとって、伝説が幸福な揺りかごのかたわらに置く、あのよき妖精たちのひとりであった人に捧げる。
>
> それはわが母である。わが母 ― 繰り返しこう呼ぶことを許していただきたい ― は、また貧しい人たちの母でもあったのだが、あるときメルヴァンの小教区の哀れな旅回りの女歌手に治療を施してやったことがある。「お礼をしたいのですが、さしあげるものは歌しかございません」とすまながる彼女に心を動かされ、それではひとつと歌を乞うた母は、ブルターニュの詩歌の独特な調子にたいへん感銘を受けた。以来、彼女は歌の収集に目覚め、しばしば、心に触れるこの貧者の貢ぎ物を受け取ったのである(55)。

ラヴィルマルケがここで明言しているように、たしかに『バルザズ・ブレイス』という歌集は、母親の収集がなければ、おそらく存在しなかった書物であった。それはたんに彼が母親の収集を利用したとか、母親が彼の収集を手伝ったとかいうレベルの話のみならず、なによりもごく身近に先例があったということが、彼がこの歌集に着手する大きな要因となったように思えるからにほかならない。いずれにせよ、この貴族の末子は、母の仕事を受け継ぐということに特別の想いがなかったろうか。彼が『バルザズ・ブレイス』の「序文」で、繰り返し母のことに言及しているのは、そのなによりの証ではないだろうか。

大革命の記憶

さて、貧者を治療し、民謡を収集したこの母親はまた、ときに子供たちに大革命当時の様子を語って聴かせることがあった。そして、その話はラヴィルマルケの記憶に永く残った。彼女は大革命で十九人もの親族を失っていた。これら死者たちの記憶を伝えるときの彼女は、誇らしげであったという。この母親は、たぶんそれを自らの使命と心得ていたのだろう。彼女自身こう書いている。

私は私たちを襲ったあらゆる不幸を目の当たりにしてきました。私はふくろう党の戦争を、キベロンの占拠を、あらゆる不運な亡命貴族の虐殺を見ました。私たちの家族も、ほかの家族と同様、こうした襲撃によってたくさん殺されました。でも、この王党派の灰のなかから、さらに献身的な新しい人たちが生まれてくるかもしれないのです(56)。

ところで、母親の話のなかでとりわけラヴィルマルケの想像力を刺戟したのは、大革命期の司祭たちの話だった。亡命

もせずに、人里はなれたプレシ・ニゾンの屋敷に留まっていた祖母が、しばしば司祭たちを匿い、その彼らが客間でミサを挙げたり、結婚式をしたり、子供に洗礼を施したりしたということ。革命派の密告でやってきた憲兵隊が屋敷を去ると、それまで隠れていた場所から嬉しそうにのこのこと出てきた、いつも農民に変装していた司祭のこと。スペインへ亡命する司祭たちが、別れを告げに屋敷を訪れたとき、門前でためらっていたひとりの若い司祭に声をかけ、家に招じ入れた祖母が、その見慣れぬ若者が「聖職者民事基本法」によって宣誓したニゾンでただ一人の司祭であることに気づき、思わず後ずさりしたという話、等々[57]。大革命の記憶は、こうして母親の口を通して、ラヴィルマルケのうちに移されていったのである。

しかし、その少年にもやがて母と別れるときが来る。彼はオーレーの寄宿舎に入り、サン・タンヌのイエズス会の学校に通いはじめる。学校は厳しく、規律は正しかった。教師は彼の才気煥発さを認めている。彼はこのイエズス会の学校での想い出を、生涯よきものとして抱き続けるだろう。しかし、やがて彼はこの学校も離れなければならなくなる。一八二八年六月十六日の法令で、イエズス会士たちの教育活動が禁止されたのである。こうして彼は、翌年、ゲランドの中等神学校へ、その三年後にはナントの中神学校へと移る。ちなみにゲランドの学校の校長は、この少年を評してこう言っている。「彼は相変わらず自惚れが強い[58]」。

一八三三年十一月、大学入学資格を得たラヴィルマルケは、翌三四年、すでに法科大学に在籍していた兄シプリアンを追ってパリに出る。この未来のバルドについて名高い浩瀚な研究書を著したフランシス・グルヴィルFrancis Gourvilは言う。「彼がもしレンヌ大学に登録していたら、あるいはそれっきりカンペルレやニゾンに戻ってしまっていたとしたら、「ブルターニュの民衆歌」はけっして生まれなかっただろう[59]」。

（つづく）

註

(1) Michel Nicolas, *Le séparatisme en Bretagen*, Edutions Beltan, 1986, pp.231-232. この訳文からは分からないが、本文は十六項目にわたって番号付きで個条書きされている。なおブルターニュの自治主義・民族主義については、Yann Fouere, *Histoire résumée du mouvement breton du XIXe siècle à nos jours (1800-1976)*, Editions Nature et Bretagne, 1977; Alain Déniel, *Le mouvement breton*, François Maspero, 1976; Morvan Lebesque, *Comment peut-on , être breton?*, Edition du Seuil, 1970.

(2) ブルトン語で ker は町、すなわちフランス語の ville に当たる。つまりこの名はブルトン語化された Villemarqué である。

(3) Olivier Mordrel, *Breiz Atao ou Histoire et actualité du Nationalisme breton*, Edition Alain Moreau, 1973, p.24

(4) Cf. Francis Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, *Deuxième partie, 13. Les Prolongements politiques du «BARZAZ-BREIZ»*。

(5) 以下の記述で特に参照した文献は、Yann Brékilien (sous la direction de), *La Bretagne*, Editions d'Organisation, 1982; Y. Brékilienm, *Histoire de la Bretagne*, Hachette, 1977; Jean Markale, *Identité de Bretagne*, Editions Entente, 1985; *Toute l'Histoire de Bretagne*, Skol Vreizh, 1997.

(6) 知られるように、ブルターニュの西半分はバス・ブルターニュ地方、東半分はオート・ブルターニュ呼ばれる。このうち歴史的にブルトン語圏であったのはバス・ブルターニュ地方である。この点の詳細は、原聖『周縁的文化の変貌―ブルトン語の存続とフランス近代』、三元社、一九九〇年を参照。

(7) たとえば、Jean Markale, *op.cit.*, p.82.

(8) このことに関する最近の文献は、Donald Sutherland, Les Chouans, Societe d'Histoire et d'Archeologie de Bretagne, 1990 (ed.anglaise, 1982)、大庭幸子「フランス革命とブルターニュの民衆文化―モルビアン県における「反革命」の様相」『西洋史学論集』第三十七号、一九九九年、二二―三九頁など。

(9) たとえば、原聖、前掲書、一九四頁。

(10) 以下、ブルターニュの「起源神話」に関する記述は、その大半を Joseph Rio, *Mythes fondateurs de la Bretagne*, Edition Ouest-France, 2000に依拠している。したがって、とくに必要な場合を除いて、個々の記述にわざわざ註を付すことはしなかった。ちなみにこの

書物は、今後この種のテーマを論じる際の必読書と言っていいほど、大変網羅的で優れたものである。なお邦語文献としては、原聖「ケルトマニアの系譜―ケルト起源神話に憑かれた人々」、鎌田東二・鶴岡真弓編著『ケルトと日本』、角川書店、二〇〇〇年、一二五―一五二頁を参照。

(11) Cf. Claude-Gilbert Dubois, *Celtes et Gaulois au XVIe siècle: le développement littéraire d'un mythe nationaliste*, J. Vrin, 1972.

(12) J. Rio はこの点について興味ぶかい推測をしている。つまり、彼がブルトゥスを斥けた背景には、宗教改革を遂行したイギリスに対する反感があるというのである。J.Rio, *op.cit.*, p.223.

(13) Bernard Tanguy, *Aux origines du nationalisme breton*, vol 1, Union générale d'éditions, 1977, p.266

(14) *Ibid.*, p.267.

(15) たとえば、原聖氏は次のように言っている。「ペズロンにとっての現代のケルト語はブレイス（ブルトン）語とカムリー（ウェールズ）語（それとわずかにケルノウ［コーンウォール］語）であり、現代の用語で言えばケルト語のブリトニック語派であるにすぎない。エイレ（アイルランド）語の知識はまったくなく、この点は（……）一七世紀の学識者たちの考えをひきずっているといっていいだろう」（原聖、前掲論文、一四二頁）。

(16) このフランス語は、ブルトン語で「パン」を意味する bara と「ワイン」を意味する gwin が合わさってできたものである。

(17) J.Rio, *op.cit.*, p.270.

(18) ラトゥール・ドーベルニュの生涯については、Yann Brékilien, *Prestiges du Finistère*, Edition France-Empire, 1969 の 5.La Tour d'Auvergne, soldat et savant を参照。

(19) Y. Brekilien, *op.cit.*, p.229.

(20) La Tour d'Auvergne, *Origines gauloises*, Slatkines Reprints, 1980, p. 26.cité par J.Rio.

(21) J.Rio, *op.cit.*, p.238-241; Anne-Marie Tiesse, La création des identités nationales, Editions du Seuil, 1999, ppé50-52; Krazysztof Romian, «Francs et Gaulois», dans *Les Lieu de mémoire*, (sous la direction de Pierre Nora), Gallimard, 1992, t.III, vol.1, 1992, pp.41-105.

(22) 欧文題目にはフランスで親しまれている名称を使用した。英語原題は、*Fragments of Ancient Poetry collected in the Highland of Scotland and translated from the Gaelic or Erse language.*

(23) 『オシアン』がフランスに与えた全般的な影響については、P.Van Tieghem, *Ossian en France*, 2 vol, Slatkine reprints, 1967.

(24) ナポレオンはエジプト遠征にも、またセントヘレナ島に流されるときにもこの書を携えていったという。またゲーテは『若きウェルテルの悩み』で都合三度にわたってこの書を引用し、とりわけ最後の引用は、実にこの小説の二〇分の一強を占める長さである。Cf. Donatien Laurent et Michel Tréguer, *La Nuit celtique*, Terre de Brume-Presses Universitaires de Rennes, 1997, pp.177-209.

(25) ヘルダー「中世英独詩芸術の類似性、並びにそこから生じる諸問題について」薗田宗人訳『無限への憧憬―ドイツ・ロマン派の思想と芸術』国書刊行会、一九八四年、二二―二三頁。

(26) この書物は一八三一年と一八三三年にEmile Souvestreによって再版され、一八三六年にはchevalier de Fréminvilleによる増補改訂版が出ている。最近では、二〇〇〇年にこの一八三六年版を底本としたものがEdition du LayeurからAlain Boulaireの序文つきで出版されている。

(27) Cambry, *Voyage dans le Finistère*, réédition par le chevalier de Fréminville, Gérard Monfort, 1836, p.41.

(28) カンブリーの生涯については、上記Alain Boulaireの序文のほか、Bernard Tanguy, «Des celtomanes aux bretoniste: les idées et les hommes», dans l'*Histoire littéraire et culturelle de la Bretagne*, Champion-Slatkine, 1987, t. II, pp.293-334; 原聖「フランス革命期ブルターニュの民族描写集『ギャルリー・ブルトン』をめぐって」、『女子美術大学紀要』第二三号、一九九三年、三一―四八頁など。

(29) 一八三六年版の「序文」で、フレマンヴィルはカンブリーの記述がしばしば皮相で不正確であることを指摘している。ちなみに彼はその理由として、著者が馬車に乗って安楽に旅した結果、多くのものを見落としたこと、自分の目で確かめず、しばしば大きな町の役人や名望家の言うことをそのまま鵜呑みにしたことなどを挙げている。Cambry, *op.cit.*, *Introduction*, pp.IX-X.

(30) カンブリーはこの旅行記のなかで、ルブリガンについてこう書いている。「私はルブリガンが、浅薄で平凡で度し難く空疎な連中によって軽々しく扱われるのを見てきた。私はこの名高い文法学者の驚くべき記憶力、想像力、知識、われわれの衣服の優雅さや住居の贅沢さとは正反対のその態度物腰、粗末な靴、服装に対して賛嘆の念を抱いていることを告白する」。*Ibid.*, p.101-102

(31) *Ibid.*, p.188.

(32) *Ibid.*, p.101.

(33) *Ibid.*, p.100.

(34) ケルト・アカデミーに関する主な文献は、Nicole Belmond, «L'Académie celtique et George Sand. Les débuts des recherches folkloriques en France», *Romantisme*, 1975, n° 9, *Le Peuple*; Nicole Belmond (sous la direction de), *L'Académie celtique*, Edition du Comité des travaux

historiques et scientifiques, 1996; Mona Ozouf, «L'invention de l'ethnographie francaise: le questionnaire de l'Académie celtique» dans *L'école de la France*, Editions Gallimard, 1984, pp.351-379; B. Tanguy, *op.cit.*

(35) M. Ozouf, *op.cit.*, p.351.

(36) ちなみに、このなかにはカンブリーも含まれている。またケルト・アカデミーの会員で、パリ以外の地方に在住するブルトン人会員三七人のうち、十二人はフリーメーソンだったという。Jeans-Yves Guiomar, «La révolution françaises et les origines celtiques de la France», *Annales historiques de la Révolutions française*, 1992, n.1, p.77; 原聖、前掲論文、四五頁。

(37) B. Tanguy, *op.cit.*, p.295.

(38) B. Tanguy, *op.cit., Aux origines...*, p.262.

(39) A.M.Tisees, *op.cit.*, p.52.

(40) B. Tanguy, *op.cit.*, p.295.

(41) A.M.Tisees, *op.cit.*, 前掲書、p.56.

(42) このアンケートはケルト・アカデミーの『研究報告』第一号に掲載されたが、その一三〇年後、フランス民俗学の大御所ヴァン・ジュネップは、それを『フランス現代民俗学要覧』第三巻に再録し、その衰えぬ有効性を確認している。Arnold Van Gennep, *Manuel de folklore français contemporain*, t.III, Paris, Picard, 1937, p.[11]; M. Ozouf, *op.cit.*

(43) A.M.Tisees, *op.cit.*, p.57.

(44) B. Tanguy, *op.cit.*, p.297.

(45) Pierre de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, p.11.

(46) *Ibid.*

(47) 息子ピエールが自身の経験として語っているところによれば、一八六〇―七〇年代でも、このニゾンの畏隈で農民にフランス語で質問して、ブルトン語以外の言葉で返事が返って来ることは稀だったという。*Ibid.*, pp.12-13.

(48) D.Laurent, *op.cit.*, p.38.

(49) F. Gourvil, *op.cit.*, p.8.

(50) P. de la Villemarqué, *op.cit.*, p.12.

(51) 息子の註によれば、その著作とは *Le grand Mystère de Jésus* (Introduction XX). *Ibid.*, p.13.

(52) 原文では mutus, mutus, mutus とラテン語になっている。

(53) *Ibid.*, pp.13-14.

(54) *Ibid.*, p.11.

(55) T.H.de La Villemarqué, *Barzaz-Breiz*, Librairie académique Perrin, 1963, III. なお、初版および第二版の序文にも、母が収集をはじめる経緯については、表現こそかなり違うものの、ほぼ同様の記述がある。ただし冒頭の献辞めいた記述はない。ちなみに、ラヴィルマルケの母は一八四七年に亡くなっている。つまり、この第三版は母の死後はじめて出された版ということになる。

(56) *Ibid.*, pp.14-15.

(57) *Ibid.*, pp.15-16.

(58) *Ibid.*, p.19.

(59) F. Gourvil, *op.cit.*, p.9.